

『草むしり』

R 4 . 5 . 1 0

3年生の種目練習。競技しているクラスメイトを大声で応援している様子をほほえましく思いながら、国旗掲揚塔の周りの草をおしっていました。

すると、練習を終わった生徒が「校長先生、草むしりですか？」と声をかけ、「手伝います。」と言って一緒に草むしりを始めてくれました。「こんなところに生えてきたばかりにおしられて、かわいそうに。」と私が言うと、「頑張って生えてきたのに。ほかのところに生えればよかったのにね。」と答えてくれます。

もう一人、「私も手伝います。」と言ってやってきた生徒がおしろうとした草を見て、「これって草ですか？」と聞いてきました。見ると紫色の小さな花が咲いています。

そうだよね。おしるのがためられるほど可憐な花が咲いています。心の中に牧野富太郎先生の言葉が思い浮かびました。先生は「雑草という名の草はない。」という名言を残しておられます。一つ一つの植物に名があり、価値があるということを教えてくださっています。

記憶はあいまいですが、ある高名な宗教家が雑誌記者に「あなたは庭に生えた草をどうしますか？」と問われ、「やむを得ずおしる。」と答えたという記事が科学雑誌に載っていました。

私は自分勝手に名のある草花をおしっていますが、「やむを得ず」という感覚だけは忘れずにいたい、そう思わせてくれる生徒とのやりとりでした。



左の写真が「草ですか？」と生徒が聞いた花。牧野先生に叱られそうですが、写真から植物名を検索するアプリを使って、「トキワハゼ」と同

定しました。間違っていたらごめんなさい。

事務室の外に生えていたのが右の写真の花。これは「マツバウンラン」とスマホが教えてくれました。

